

【教科名】応用化学工学演習 Practice in Applied Chemical Engineering <履修単位科目>						
学年	学科	単位数	期間	開設週数	時間/週	総時間
5	物質化学工学科 応用化学工学コース	(必修)2	通年	30	2	60
【担当教員】 小畑 賢次(前期) 【教員室】7号館2階 【TEL】964-7245 【e-mail】obata@kct.ac.jp 園田 達彦(後期) 7号館2階 964-7302 sonoda@kct.ac.jp						
【授業目的と概要】 物理化学は、応用化学工学の基礎教科であるので、前期では、物理化学に属する分野に位置づけられ、かつ物質化学の基礎である、金属およびイオン性固体、分子性の物質、分子の回転と振動について学習し、演習を行う。後期では、化学工学において重要な化学平衡、相平衡、反応速度論について、演習問題を中心に数理的取り扱いの理解を深め、必要に応じて補足説明を行う。						
【授業の進め方及び履修上の注意】 前期では講義と並行して演習を行い、理解度を深める。後期では、演習中心の授業形式で学生に解説を求めることがあり、積極的な取り組みが求められる。「応用化学工学演習」の関連科目として「物理化学」、「有機化学」、「無機化学」、「物理化学演習」、「応用物理」、「生物反応工学」があり、その科目を復習しておくことにより授業内容をよく理解することができる。						
授業項目	内 容					時間
【前期】 1. 金属、イオン性固体、共有結合固体 2. 分子間相互作用 中間試験 3. 分子の回転と振動 期末試験	・固体のバンド理論、格子エンタルピー、結晶の単位胞、結晶面の同定、X線回折におけるブラッグの法則について学習すると共に、演習を行う。 ・分子性物質における引力のもとになる相互作用について学習すると共に、演習を行う。 ・分光法の特徴、回転分光法、振動分光法について学習すると共に演習を行う。					10 10 10
【後期】 1. 相平衡 2. 化学平衡 中間試験 3. 反応速度論 定期試験	・純物質の蒸気平衡、蒸気圧の温度依存性、溶液の蒸気平衡など。 ・化学平衡の原理、圧平衡定数と濃度平衡定数、化学平衡と自由エネルギー、平衡定数の温度依存性など。 ・反応速度の定義と速度則、反応次数、素反応、定常状態近似、律速段階近似、逐次反応、酵素反応、反応速度の温度依存性など。					12 8 10
【達成目標】 <前期>・金属、イオン性、共有結合固体の概念を理解し、応用できる。 ・分子性物質の相互作用を理解し、応用できる。 ・分光法の特徴、回転及び振動分光法を理解し、応用できる。 <後期>・化学平衡の原理と応用を理解できる。 ・相平衡の原理と応用を理解できる。 ・反応速度の原理と応用を理解できる。				【教科書】 物理化学要論第4版、東京化学同人、P.W.Atkins 著、千原秀昭他訳 【参考書】 物理化学、東京化学同人、P.W.Atkins 著、千原秀昭他訳		
JABEE 教育目標	(B) , (C)					
準学士課程目標	(B) , (C)					
成績評価	【評価基準】 物理化学で現れる式や法則・概念の持つ意味を理解できていると共に、数理的取り扱いができていないこと。 【評価方法】 <前期> 中間及び期末試験 80%、演習及びレポート等 20% <後期> 中間及び定期試験 80%、レポート等 20%				【オフィスアワー】 放課後(木曜)	